

絶対に切れない絆

水音ワールド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は大海賊時代……。

仲間と離れ離れになったルフィは公開処刑される兄エースを救うため、マリルフォードを突き進む……。そんな中、ある男もまた、動き出していた……！

時はさかのぼり……。ボア・ハンコックによってルフィが助けに来たことを知らされたエース……。自分のせいでルフィを死なせたくない……。危険にさらしたくないという思いが、ある男に届いていたのかもしれない……。

「俺はどんなことをしてでも、助けに行く！」

失ってたまるもんか！絶対に……！」

この男の言葉によって、未来が大きく変わろうとされていた！

1話を読んだら5話まで飛んでも原作を知っている人は大丈夫です！

よろしくお願いします！

目次

さらなる決意	1
さまざまな思い	3
脅威	6
霸王色の覇気	9
“させねーよ”	11
再会	13
戦争の行方	15
終戦	17
1枚の記事	19
サボに起きた悲劇	23
だましていた傷	25
2人の涙	28
変人3人組!?	30
レイリーの考え	32
ルフィの決断	36
3D2Y	40
修行スタート!	44
海賊 麦わらのルフィ	48
再集結! 麦わらの一味! & 集結! 偽麦わらの一味!?	51
ルフィ到着・・・からの遊び	55
三兄弟の攻撃	59
麦わらの一味 再スタート 前編	63
麦わらの一味 再スタート 中編	66
麦わらの一味 再スタート 後編	70

さらなる決意

「約束したんだ！エースは・・・」

エースは絶対に死なない！俺が死なせねえ！」

ルフィはマリルフォードに向かっていている船の中で、イワンコフたちにエースと兄弟になつたいきさつやいろんな出来事を話していた・・・。

最初はエースに嫌われていたこと、ある事件で自分が死にそうになったとき助けに来てくれたこと、その事件によって自分を認めてもらえたこと、

盃を交わして兄弟になったこと、兄弟3人で狩りに行ったこと・・・そして・・・兄弟の一人が死んで、誓いを・・・約束をいっぱい立てたこと・・・。

ルフィは兄弟が死んだときの痛みを忘れることはできなかった・・・。
だからこそ、たった一人の兄、エースは絶対に死なせたくなのだ・・・。

あの痛みを2度と味わいたくないから・・・。

「麦わら〜お前そんな悲しい過去があつたのかよ〜」「だがね〜」(泣)
「麦わらボーイとエースボーイの間にそんな出来事があつたつきやぶるね」

(それにしても、ドラゴンの息子と海賊王の息子が義兄弟って・・・すごい運命ね)

「エース君の弟思いもその件が関係しているんじゃないやろうな。

これはあんたを死なせるわけにはいかないな・・・。

ルフィ君は絶対にわしが守る、そしてエース君も助けよう！」

バギー、Mr. 3、イワンコフ、ジンベイが各々ルフィの過去に悲しんだ。

「ありがとう！ジンベイ！みんな！恩に着るよ！」

ルフィは過去を思い出して出てきた涙を拭きとり、いつもの力強い顔に戻した。

ルフィにとって、過酷な出来事が精神面でも肉体面でもいっばい連続で起こっている。

仲間と離れ、エースの公開処刑を知り、インペルダウンに乗り込み死にかけ、

黒ひげにあい・・・友人であるボン・クレーを失った。

それなのに、ここまで強い意志を持つていられるのは、やはり兄弟の絆が

あるから・・・過去にいろんなことを経験しているからだと言ベイは感じ取っていた。

(大切な人を守るために、俺は強くなったんだ！

エースは絶対に助ける！

みんな、ちよつと待つてくれ・・・。

エースを助けたら、すぐに戻るから！)

ルフィがエースと仲間を思いさらに強く決意を固めている中・・・とある島では・・・

「本当に行くの??死ぬかもしれないんだよ??

**君・・・。それに・・・昨日まで寝込んでいたのに・・・。」

「ああ・・・時間がないんだ。何もしないで見殺しになんてできない・・・！

大切なやつなんだ・・・！ここで後悔だけはしたくない！」

ある男がエースを助けるために、ついに動き出していた・・・。

この男は誰なのか・・・そして、エースを救い出すことができるのか！

続く

やまげごまな思ひ

「エーーーーー……スーーーーー……」

助けに来たぞーーーーー!!!」

ついにマリンフォードに到着した、ルファイたち。

決意を固めたルファイに振ってきた言葉は、想像もしていなかったことだった。

……ルファイ以外は。

「来るな!ルファイ!」

「「「……え?」」」

「わかっているはずだぞ!俺もお前も海賊なんだ!

思うままの海に進んだはずだ!俺には俺の冒険がある!

俺には俺の仲間がいる!お前に立ち入られる筋合いはねえ!

お前みたいな弱虫が、俺を助けに来るなんて……!

それを俺が許すとも思ったのか!こんな屈辱はねえ!!

帰れ!ルファイ!なぜ来たんだ!!!」

(頼むルファイ!お前まで道ずれにならないでくれ!)

これは俺の失態なんだ!!!)

ルファイはエースがそう言ってくることを、心のどこかでわかって
いた。

でも、そう思う理由はルファイがエースを救いたい理由と一緒なもの
わかっていた。

そう……”二度と兄弟を失いたくない!”という気持ちだ。

だから、ルファイは構わず先を進んだ。自分がどれだけ傷ついたとし
ても、

エースの命には変えられないから。

だって……だって!!

「俺は……!弟だーーーーー!!!」

「……くう……」

「ルファイ……」

ルファイの言葉にガープは悔しそうにうなり、エースは何も言えなく

なった。

エースは、仲間が、ルフィが傷つけられるのは見たくないと思いつつも、

助けに来てくれたことが、何よりもうれしく思ったから……。自分は生きていちゃいけない、そう言われ続けたからこそ、生きていと思ってしまったから……。ガープは、自分の立場ではいけないと思いつつも、自分の孫のような存在であるエースを心のどこかで救いたいと思ってしまったから……。

「くそ！なんでだ！……じじい……」。

俺は自分の命なんてどうでもいいって思っていたのに……今は、命が……。命が……。命が……。命が……。命が……!!!」

自分の涙を隠すように頭を地面に擦り付けるエースと

「エース……」。

なぜ……。なぜわしの言うことを聞かないんだ!!!」

ただただ、孫を思い涙を流し苦痛の表情を浮かべるガープ。

二人は葛藤していた……。

そんなとき海兵の頭は混乱していた。

「弟だ?!?じゃあ、麦わらも海賊王の息子?!?」

「そんなはずはない! 母親は火拳を生んだ時に死んだはずだ!」

だが、センゴクの言葉により混乱が驚きに代わった。

「うろたえるな!」

二人は幼少期の時、一緒に過ごした義兄弟だ!

だが、麦わらも危険因子には違いない!

(ガープ……。言うぞ!)

麦わらの父親は革命家……。ドラゴンだ!」

この事実には、エースを含め船で知らされた者以外は全員が驚いたことだった。

この事実を隠していたガープは、悔しさをかみしめるような顔をしていた。

できれば公表したくなかった。そんな気持ちを手取るようにわかる。

「ルフィ・・・そうだったのか。」

エースは自分と重ねて、海軍は明らかになった血筋に驚愕の表情を浮かべる。

エース公開処刑まで・・・残りわずか・・・。

続く

脅威

「ルフィ・・・ソナタが鬼の子でもわらわは愛すぞ?」

「その名前知ってるだがねくくく!!!」

「ソナビツクなパパッタノネ。」

ハンコック、Mr. 3、バギーがルフィの父親を知り驚いている中、ルフィは海軍に今まで以上に狙われていた。

それにより、さらに傷が増えていくルフィ。そんなルフィをジンベ
イ・イワンコフが

支えながら、エースのいる処刑場へと向かっていく。が、そんなル
フィに白ひげがストップをかける。

「おい小僧!おまえはもう帰りな。ドラゴンの息子であるとわかった
今、お前は海軍の標的になった。兄貴を助ける前にてめえが無駄死に
するだけだ。エースのことは俺たちに任せな、足手まといだ。」

「親父・・・。」

ルフィは足を止めて、白ひげを見上げる。

処刑台からはエースが様子をうかがっていた。

「俺の人生を・・・お前が勝手に決めるなよ!!エースは俺が絶対に助け
るんだ!足手まといになんかならねえよ!(べくく)」

誰もが白ひげの怒りを聞くものだと思つて、ハラハラしていた。

四皇である大海賊白ひげに向かって、けんか腰に話していたのだか
ら。

ルフィ本人はもう話は終わりだと視線をエースに戻す。

「ふはははは、気に入ったぜ小僧。いいだろう。エースは任せたぞ!」

「いわれなくてもそのつもりだ!!」

飛び出していくルフィをみて、笑みを浮かべる白ひげ。

死なせたくなと思うせるその強い瞳にかつてのロジャーを思い
出す。

”D”の意思、ロジャーが待っている男はあの小僧であつてほしい
と白ひげは思つてしまった。

「白ひげ海賊団!!!エースの弟を、全力で援護しろーーーーー!!!」

「うおおおおおおおおおお!!」「!!」「!!」

白ひげ海賊団の援護により、どんどんエースに近づいていくルフィたちだが海軍大将黄猿が立ちはだかる。

「うくん。行かせないよ〜? 麦わらのルフィ〜。」

「グハツ!!」

ピカピカの実の能力で、突然現れた黄猿の攻撃に対処できず、ルフィは

エースとは逆のほうへ飛ばされてしまった。

「ルフィ君!!」「麦わらボーイ!!」

ジンベイとイワンコフがルフィの名を呼びながら急いで駆けつけるが、黄猿の速さにはかなわない。黄猿はさらに、ルフィに攻撃をしようとしていた。

「エースの弟は、やらせねえよい!

行け! エースは頼んだぞ!

だが、白ひげ海賊団、不死鳥のマルコによって助けられた。

ルフィは、ありがとうといつてまたエースのもとに走り出す。

「うくん。不死鳥のマルコ〜邪魔しないでくれるかな〜。」

「そうはいかねえ! 親父がエースの弟を生かしたいと思つた。なら俺たちはその思いにこたえるだけよ!!」

マルコの手によつて黄猿は引き止められ、安堵するもそう簡単にはいかなかった。

新たなる脅威がルフィたちの前に現れる。

「おい! なんだあの大群は!!」

海賊の指さす手の先を見ると、パシフィスタの大群。

そのほかにも大きな障害がいくつもある。

海軍大将が2人に、ハンコックを抜く七武海、そして、センゴクにルフィの祖父である英雄ガープ。

「くそ! お前ら邪魔すんじゃねー!!」

倒しても倒しても現れる敵にルフィの体力はどんどん削られていく。

視界に入るエースの処刑台にはさつきはいなかった刀を持った死

刑執行人が2人のぼっていた。

「未来がみたけりや、すぐに見せてやるぞ！白ひげ！！やれ！」
助けられる距離にいるものは誰もいない。

誰もがこれから起こることを想像し、叫んだ。

「「「エーーーーー」」」

続く

霸王色の覇気

「俺がそれをさせると思ってたのか！・・・グツ・・・！」
白ひげ、そしてルフィたち全員が助けようとするものの、白ひげは重症、

ほかのものは動けても、脅威がたっさんいることにより、先に進めない。

エースの両サイドに死刑執行人がたつ。剣を構え・・・エースの首に向かつて・・・振り下ろされる!!

「やあめえろー！ー！ー！ー！ー！！！！」

ルフィの言葉により、海兵や白ひげ海賊団の一部、死刑執行人などの力の弱いものは次々と倒れて行った。だが、ルフィは特に気にすることもなく、エースのもとに駆けていく。

「麦わらボーイ！今のは・・・？」

「おいおい、まじか！」

「うくん。驚いたね〜」

「・・・」

「・・・小僧！」

みんなが驚いているのも無理はない。

これは、選ばれたものにししか使えない・・・”霸王色の覇気”

それをルフィは、エースが危機にさらされたことよって、無意識に出したのだ。

そして、それのおかげでエースの処刑は先延ばしになった。

「くそ！麦わらめ！やはり素質を持っていたか！

おい！代わりの者を急いで連れてこい!!」

センゴクの命令で代わりの者が来るまでが、エースを救うタイムリミット・・・。

ルフィはさらにスピードを上げ、かけていくが、パシフィスタによって阻まれる。

パシフィスタはルフィを視界にとらえ攻撃しようとしたが、ルフィのもとに攻撃が来ることはなかった。

「誰じゃ！わらわの愛しのルフィに、こんなロボットを仕向けたのは!!」

「ハンコック!!」

ハンコックの攻撃によって、パシフィスタは襲ってこなくなった。しかし、ハンコックはルフィに名前を呼ばれたことにより、妄想に入っていた・・・

目的を忘れて。(汗)

「ルフィに名前を呼ばれたしまった？これが世にゆう、”結婚”!」

「いや、結婚はしねえけどな！とりあえずありがとう!」

「ハッ!しまった!待つんじゃ!ルフィ!これを。」

「??これは?」

ハンコックの手にしていたもの、それはエースをつなぐ手錠のカギだった。

ルフィの役に立つため、ひそかに手に入れていたのだ。

ルフィはうれしくてうれしくて、つい抱き着いてしまった。

それにより、ハンコックは使い物にならなくなった・・・。(汗)

「ありがとう!ハンコック!こんなの、俺、俺

とにかくありがとう!!!」

「いいのじゃ、いいのじゃぞ、ルフィ?

それよりも早く兄上をお助けするのじゃ。」

「うん!本当にありがとう!」

エースのカギを手に入れたとき、イワンコフの頭からイナズマが出てきて

エースへの道を作ってくれた。

これでエースを助けられる!ルフィは急いで道を駆け上がる!

そんなとき、ルフィが一番戦いにくい相手・・・ガープがついに戦いに参戦した!

「ここを通りたくば、わしを倒していけ!麦わらのルフィ!

今からお前を・・・敵とみなす!!!」

続く

“させねーよ”

「クツ・・・頼むーじいちゃん！

そこをどいてくれ!!!」

ガープによって拒まれる、エースへの道。

できることなら戦いたくない相手にルフィの表情はゆがむ。

だが、ガープを倒さなければエースは救えない。ルフィは覚悟を決めガープを見る。

「うおおおおおゴムゴムの・・・ピストル!!!」

いつものガープなら、簡単によけたはずだ。

だが、今のガープはよけることができなかった。

なぜなら、ガープもルフィと同じようにエースを・・・死なせたくなかったから。

もろにルフィの攻撃をうけ、落ちていくガープ。

ルフィはようやく、エースのもとにたどり着く。

「はあああ、やっと、やっとここまで来たぞーエース！」

「ルフィ!!・・・お前ってやつは。」

ハンコックにもらっていた、カギを使いエースの手錠を外しているとき、

センゴクからの攻撃で、死刑台が壊れてしまう。

落下していくルフィとエース・・・。

その時、エースに火が宿った。戦場におり、海兵を倒していくルフィとエース。

「俺の弟なんだ、手出し無用で頼む。」

兄弟の息の合った攻撃により、海賊の勝ちだと思われた。

だが、そこに赤犬がついに姿を現す。

「火拳を助け出しすぐに退散とは、腰抜けの集まりじやな白ひげ海賊団。まあ、船長が船長。白ひげは戦の時代の敗北者じゃけえ。」

白ひげは、赤イヌとは戦うな、逃げろと言った。目的は達成したのだからと。

だが、エースは赤イヌの言葉で完全に頭に血が上っていた。

「今の言葉・・・取り消せよ。」

白ひげは・・・親父は敗北者なんかじゃない！この時代を作った大海賊だ!!」

そう言つて、エースは赤イヌに殴りかかる。

が、これが狙いだつた赤イヌは簡単に攻撃をかわす。

そして・・・エースにとって一番つらい言葉を発したのだった。

「お前なぞいつでも殺せる。じゃけん、あいつを先にを殺す。」

見ちよれ、お前を助けに来たことで殺される弟の姿をな！」

赤イヌの言葉を聞き、急いでルフィを見るエース。

だが、ルフィはエースのビブルカードを落としてしまい、それを拾っているところで

赤イヌの行動を見ていない。ルフィは反応できなかった。

「ルフィーーーーー!!!」

エースはルフィをかばうように赤犬とルフィの間に立つ。

それを見ていたものはこれから起こるであろうことを瞬時に想像して目を見開く。

エースの体にマグマの拳が貫かれてしまう未来を。誰もが突然のことに動けなかった。

絶望しそうになつた時・・・紺色のコートと鉄パイプが視界に入る。

「させねーよ。この俺が来たからにはな!!」

その言葉とともに、赤犬は吹き飛ばされていた。

続く

再会

「させねーよ。この俺が来たからにはな!!」

そう言つて、赤イヌを吹き飛ばしたある男は・・・

エース、そしてルフィを抱えて走り出した。

「おい！まて！俺はまだあいつに用がある!!」

親父を悪く言つたんだ！ここで逃げれるかよ!!はなせー!」

だが、エースは暴れだした。男の顔を見るまでは・・・。

男は、泣きだしそうなつらい表情だった。

そして、こういった。

「仲間思いなのは、昔から変わらねーな。

だが、頼む・・・ここはおとなしくしててくれ!

お前を・・・お前らを失いたくない。」

その言葉をきいて、エースは動けなくなった。

ルフィは何が起きているのか、正直わからないといったような感じで固まっていた。

そして三人はそのまま、男の船に乗り、去っていった。

「おんどれ!!あの男！何者じゃー!」

「なぜ、ヴァナータがここに居るつきやぶる!?!」

マリンフォードにいた、全員が混乱していた。

いきなりの出来事に、頭が付いて行つてないのだ。

その中に一人、放心状態で三人の後を追おうとしていた人物がいた。

それは、ガープだ。

「おい！ガープ！どうした！どこに行く気だ!」

センゴクがガープの肩に手を置く。だが、ガープは止まらない。

「あの男は・・・いや、そんなはずはない・・・でも・・・あの男は・・・。」

「あの男を知っているのか!?!」

センゴクは問う。

だが、ガープは聞こえていない。それだけ信じられないことが・・・信じられない人物が目の前に現れたから・・・。

そのころ、男の船に乗っている、ルフィ・エース。

その船には、ルフィの声だけ響いていた。

「誰だか知らないけど、ありがとう！俺たちを……エースを助けてくれて！」

本当にありが……エース??」

だが、エースの顔を見て、ルフィは何も言えなくなった。

エースは男の顔を見たまま、信じられないものを見ているかのような顔をしていたからだ。

そして男は、懐かしいものでも見るような……気まずそうな……そんな顔をしていた。

ルフィは二人を交互に見つめ、??マークを浮かべていた。

そんなとき、エースが震える声で言った。

「……サ……ボ……ボ……?」

エースの言葉を聞き、ルフィは男のほうを見る。

そして、エースの言葉が本当なことをルフィは確信した。

男の服装、武器、声、口調、そして、顔。忘れるわけがない。

ルフィは涙を流し、男の名前を叫び、抱き着いた。

「サボー……!!!」

「久しぶりだな、エース、ルフィ。」

そう言ったのは、死んだと思われていた……兄弟”サボ”だった。

続く

戦争の行方

「うあああああ、エツ・・・グ・・・エツ・・・グサボーーーー！」

生きてたのかよー、エツ・・・グ、うおおおん」

死んだと思われていたサボとの再会。

ルフィは、泣き散らしながら再会を喜んでいた。

サボは2人が自分に気づいてくれたことがうれしくて、泣きそうになっっていた。

「本当に、間に合ってよかった！俺は何もできないまま、

2人の兄弟を失うところだった。また会えてうれしいよ、エース、ルフィ！」

サボもまた、喜びを口にしていたとき、感動の再会を打ち消したのは・・・エースだった。

「どうして！今まで会いに来なかった！会いにこれなくても生きていることを

なぜ教えてくれなかった！俺たちはずっと悲しんでいたんだ！苦しんでいたん

！！」

エースはサボが生きていたことはうれしかったが、それと同時になぜ今まで俺たちに会いに来てくれなかったのかという、悔しさや怒りがこみあげてきていた。

サボは顔を引き締め、エースとルフィに向き合った。

「すまない。だけど聞いてくれ！俺に何があつたのかを・・・。」

サボは自分に起きた出来事を語り始めた。

そのころ・・・マリルフォードでは・・・

突然現れた男が何者なのか・・・騒ぎになっていた。

「あの男は誰だ！エースは無事なのかよー！」

「このわしをコケにしよって・・・！」

「なぜサボが麦わらボーイとエースボーイを助けたの!？」

イワンコフが男の名前を口にしたのを、ガープは見逃さなかった。

そして、あの男が自分が思っている人物と同一人物だということも分かった。

ガープはうれしくなり、無意識に男の名前を口に出していた。

「サボ・・・生きておったのか・・・」

なら安心じゃ。よかつたな、エース、ルフィ・・・！」

ガープのそばにいてこの言葉を聞いたセンゴクは、男の正体が分かった。

センゴクはガープからいろんなことを聞いていた、ルフィの父親も、エースの父親も

エースとルフィが義兄弟なことも・・・もう一人死んだ兄弟がいることも。

もし、その兄弟が生きていたのなら、2人の兄弟が死にそうになっているとき、助けに来るに決まっている。センゴクは納得していた。

そんなとき、新たな船が戦場にやってきた。

「この戦い、終わりにしてもらおうか！火拳はもうここにはいない！お互いの目的がいなくなつたんだ！このまま続ければこの世界の均衡が崩れることになる！俺たちの名において海軍、白ひげ、どちらも引いてもらおうか！」

そこに現れた男は、赤い髪で目元に傷があり、ルフィの命の恩人でもある・・・。

四皇・・・”赤髪のシャンクス”だった。

続く

終戦

(ルフィ・・・エースを救えてよかったな。

だが、今回の件で自分の弱さに気づいただろう。強くなれ！

そしてここまで来い！ルフィ！)

突然のシャンクスの登場に戸惑うマリンスフォードではシャンクスはひそかに

ルフィのことを考えていた。だが、赤イヌによつて現実に戻される。

「赤髪！貴様がここに来た意味は分かった、じゃが、海賊の言葉にこのわしが従う　　と思つておるのか！」

赤イヌはシャンクスの申し出を断つた。だが、元帥であるセンゴクはシャンクスの言葉を聞きいれた。

「赤髪・・・お前なら・・・いい。海軍は手をひこう。何か思うところがあるのだ　　ろう？」

「ああ、傷がうずくんだ。ティーチ：今は黒ひげか。あの男が何かよからぬ　　ことをするかもしれない。ありがとう、感謝する。」

シャンクスは目元の傷を押さえながら言った。

赤イヌは顔をさらに険しくし、不快な顔をしたが元帥の言葉には逆らえず、身を引いた。

白ひげ側も、今はけがが多い・・・何よりこれ以上戦うことは白ひげの死を意味する。

おとなしく手をひくことにした。

「助かったよ！赤髪！エースは救い出された！これ以上戦つても、死者が増える　　だけだ！ひけーひけー！」

マルコの声により船に乗り始める白ひげ海賊団・・・およびバギーたち。

その時一人の男が、白ひげの横を通る。それはガープだ。

「エースのことは安心せい。二人を連れだした男の名はサボ。」

二人のもう一人の兄弟じゃ。今頃喜びの再会をしてるはずじゃ。」
ガープは小声で白ひげに事実を伝えた。

白ひげもそれを聞いて、安堵の表情を浮かべた。そして、船に乗る際シャンクスに向かって言った。

「小僧、借りが一つできたな。」

「そうか？ そう思うなら今度酒でも一緒に飲もう。」

その後、無事に戦争が終わり、その日の出来事が新聞に載った。

シャンクスのことは特に大きく報道されたが、それに負けずとある男の写真が大きく乗った。それはサボだ。見出しに”謎の男の正体は!?”と書かれている。

まだ誰もサボの正体がわからずにいた・・・一部の人間を除いては・・・。

そのころ、戦場だったマリンフォードに一人の海兵が立っていた。

そこはルファイが死にそうになった場所だ。海兵は何もできなかったことが悔しかった。

怖くて何もできなくて情けなくて、ルファイみたいになりたいと思っ
てここに立っている。

ルファイが死にそうになったとき、自分の中で変わったことがある。
それは覇気だった。

この日以来、海兵は急成長する。海兵の名はコビー。ルファイの友達
である。

「ルファイさん。あなたのように僕は、なれるでしょうか？ いや、なつて
見せませす！」

続く

1枚の記事

ついに戦争が終わり、戦争についての新聞が世界中に渡った。シャンクスの登場は世界を驚かし、話題になった。

そんな中、一部の人間にだけシャンクスのことよりも、エースとルフィを救った

男に注目を当てていた……。

様々な島に飛ばされた、麦わらの一味は……

新聞を見て、ルフィの身におこっていたことを知る……。

”ナミ”

「そんな……ルフィがこんなつらくて危険な思いをしていたなんて……。

ルフィはいつでも助けてくれた……なのに！ここで私は何をしているの!?!」

ナミは記事を見て、ルフィのために自分が何もできなかった……何も知らなかったことが悔しくて、目に涙を浮かべていた……。

「でも……エースとルフィを助けてくれたこの新聞に載っている男……見覚えがないわね……誰かしら……?」

”サンジ”

※たばこ

「なに……!?!……(シユポ)ふく……さすがだなルフィ。傷も深いだろう、早く合流して、俺のくそうまい料理を食わせてやるか。だが、この新聞の男……だれだ？ルフィの知り合か?」

”ゾロ”

「ルフィの兄貴つかまつてたのか。だがうちの船長は海賊王になる男だからな。これぐらい当然だ。にしても、知らねー顔だな……誰なんだ。」

”ウソップ”

「俺が遊んでいるときでさえ、ルフィは命がけで戦っていたんだ！そして親父も……。くそ！俺だって……。麦わらの一味だ。このままじゃ終わらないぜ！」

・・・なんにしても・・ルフィを助けてくれたこの男には感謝しなきゃだな！」

” チョツパー ”

「えー！ルフィの奴こんな戦争で戦っていたのか!? ってことは絶対に大けがを負っているに決まってる！ルフィを助けてくれた男ちゃんと医者を呼んでくれてるかな。」

・・・って麦わらの一味の船医は俺だー！ー！！」

” フランキー ”

「アウー！スーパーなことしたじゃねえか！ルフィ！さすが俺が認めただけのことはあるぜ。だが・・この男は知らねーな。味方か??」

” ブルック ”

「ヨホホホホホホ！さすがですね、ルフィさん。いや、お見事！これは私も負けてはいられませんね・・ヨホホ！しかし・・このお方は誰なのでしょう。ルフィさんのお知り合いでしょうか。」

” ロビン ”

ロビンは革命軍に保護されており、新聞も革命軍からもらったものだ。

「ルフィ！よかった無事なのね。この男は誰かしら??」

「その男はわれわれの同胞であるサボです。」

ロビンが口にした質問を、すぐさま答えを返す革命軍の戦士。

正体はわかったが、ロビンは納得しなかった。

「どうゆうこと？革命軍がなぜ、エースとルフィを助けたの??」

確かにルフィの父親は革命軍のトップよ、だけどエースとは義兄弟。

エースは革命軍と一切かかわりがないはずよ。しかも、ルフィが戦争にいたのが 分かったのは今日なのだから、実質、火拳のエースを助けに行っただけでしょう?」

革命軍の戦士は少し気まずそうな顔をした。

そして、重そうに口をゆっくり開いた。

「実は、我々も最近知ったことなので戸惑っているのですが、麦わら、火拳、そしてサボ。この三人は同じ島で育った、義兄弟なのです。」

この言葉を聞いて、ロビンの顔は晴れたようだった。

少し笑みを浮かべ、いつもの余裕のある表情に戻ったのだ。

「そうなの?なら安心ね。ルフィも喜んでるわ。ふふ、ルフィの父親と兄弟が同じところに所属してるなんて……。運命って不思議なものね。」

そして、東のある島では……。

新聞を見て、大騒ぎになっていた。

「お頭……お頭……!大変です!これ見てください!」

「戦争が終わったのかい?!エースは無事か!」

ダダンはドグラから新聞を奪い取り見る。

エース、そしてルフィの無事を知り安堵するが、一瞬だった。

男の写真を見たからだ。ダダンたちはすぐにきづいた。

男がエースとルフィのもう一人の兄弟であり、死んだはずのサボだっただけだ。

ダダンたちは気づいたのに、何度も目をこすっては写真を見ていた……。

「本物だ……。間違いない、これはサボ……。うう……。うあ……。うう……。生きてやがったのかこのガキ……。こつちがどれだけ、エースとルフィがどれだけ悲しんだかわかってんのかよ……。今度会ったら殴ってやる……。泣」

ダダンたちは大泣きした。

少しの間だったが、自分の子供となった男がいきなり新聞に現れた。

死んだと思っていた男が急に現れた。ダダンには正直頭の整理がで
きず、ごちやごちやになっていた。だが、一つだけ・・・一つだけ頭
に会った言葉・・・それは・・・

？生きててくれて・・・ありがとう!?

続く

サボに起きた悲劇

時は少しさかのぼり、ルフィ・エース・サボたちは、話をしていた。「俺は革命軍にあの日、命を救われた。俺を拾ってくれた人の名はドラゴン。」

革命軍のリーダーだ。」

「俺の父ちゃんがサボを助けてくれたのか」（泣

きすが父ちゃん！ありがとう！」

「変な縁だが、ルフィの父ちゃんには今度お礼しなきゃだな。兄弟として。」

サボはまだドラゴンがルフィの父親だと知らなかった。

だから、一瞬何を言っているのか意味が分からなくて、固まってしまった。

そして急に動き出す。

「え!?!ドラゴンさんがルフィの父親!?!え!?!どうゆうことだ!?!」

そんな話聞いたこと・・・えええええ!?!」

サボはパニックっていた。まあ驚くのも無理はない。イワンコフでさえ吹き飛ぶほど驚いていたのだから。しばらくして、サボは咳払いしながら落ち着きを取り戻し、話をつづけた。

「そのルフィの父親・・・ドラゴンさんに拾われ、一命をとりとめた俺だが・・・記憶を失ってしまったんだ・・・。自分の名前だけはハンカチに書いてあったからわかったが、お前らの兄弟のことも自分のことも覚えていなかったんだ・・・。」

エースとルフィは話を静かに聞いていた。記憶を失っていたというのを聞き、言葉が出てこなかったというほうが正しいのかもしれない。二人は黙ったまま唇をかみしめ、兄弟の身に起こったことをつらそうに聞いていた。サボはそんな二人の顔を見て、少し困った顔をした。

「そんな顔をするな、こう見えて俺は革命軍の仲間と楽しくやってるんだ。・・・話をつづけるが・・・俺は記憶がないながらも、体はしっかり覚えていたから、すぐに戦力に加わり、いろんなところに行き

戦った。俺の運命が変わったのは：：任務を終えて帰ってきた時だった。俺は今まで思い出せなかった記憶を急に思い出し、倒れてしまったんだ。なぜ、急に思い出したのか：：理由はお前だ：：エース。」

突然名前を呼ばれ、下を向いていたエースは顔を上げた。
その顔には、驚きが混じっている。

「俺……？」

サボはうなずいた。

「ああ。俺は任務から帰った日、新聞を見たんだ。エースが：：エースが公開処刑されるっていう忌々しい新聞を……！」

サボの手には力が入り、顔は険しくなっていた。

その様子を見るからに、エースの新聞は記憶を失っていたサボにとって、とても苦しく：：信じられないものだったんだろう。ルフィはさらに涙を流した。自分もエースの記事を見たときすごくつらかった……だから気持ちかわかるのだ。

「サボ……ううう……」

「……でも、そこで思い出してよかった。もし、どつちかが死んだ後に思い出していたら……俺は……俺は……。死ぬほど後悔していただろう。助けに行けなかったことを……！」

エースはサボを責めてしまったことを後悔していた。自分が情けなくて、顔をあげられなかった。

ルフィはサボにまた抱き着いた……泣きながら、自分たちを助けてくれたことに、生きていてくれたことに感謝しながら……。

だが、急にルフィから声が聞こえなくなった。エースは不思議に思い顔を上げると……

ルフィはサボからずり落ち……倒れてしまったのだ。

「ルフィ……！！！！」

続く

だましていた傷

「おい！ルファイ！ルファイ！どうして急に！」

エースは急に倒れたルファイをゆすりながら、混乱していた。

さつきまでうるさいくらいだったのに・・・なぜ！・・・と・・・

そんな中、サボはルファイを心配しながら冷静にルファイの様子を見ていた。

「呼吸はあるが、弱い・・・そして今のルファイの状態・・・」

この症状・・・まさか！そうだとしたら、かなりまずい！急いで治療しないと！」

冷静だったサボも原因がわかり、あわて始めた。

早く治療しないと、ルファイの命にかかわるからだ。

だが、サボは医者ではない。自分には何もできない。そんな絶体絶命の時・・・

ザバーーン（水しぶき）

海から潜水艦が出てきた。海賊マークが書かれている。

男が一人出てきた。そう、トラファルガー・ローだ。

「マリンフォードから追ってきた。そこに倒れているのは麦わら屋だな。こつちに連れてこい。俺が治療する。」

エースとサボは突然のことに警戒するが、ローがオペオペの実の能力者で医者であることが分かり、急いでルファイを連れて行った。

「これはひどいな。何があつたか知らねえが、手術は不可能だ。」

エースとサボがローの言葉を聞き、絶望していた。

だが、すぐに希望の満ちた目になる。

「俺の能力がなかったらの話だ。これは荒療法になる。お二人さんは出てってもらおうか。後この麦わら屋のポケットに入ってた電伝虫も持ってけ、邪魔だ。」

エースとサボは電伝虫に驚きながら、部屋を出て行く。ルファイが助かることを信じて。

そんなとき、電伝虫が鳴った。

プルプルプル・・・プルプルプル・・・ガチャ

サボが出ると、女の声が聞こえてきた。その声はとても慌てているようだった。

「ルフィ！無事か!?」

「その声は海賊女帝のハンコックだな。俺はサボ。ルフィは・・・倒れた・・・。」

サボがいうと、向こうでハンコックが倒れた音がした。

そして、サボにとつてなじみのある声に変った。

「サボ！ヴァナタがなぜそこにいるのかはこの際どうでもいいわ、今は麦わらボーイのことよ!・・・サボは症状を見てわかったんでしょけど、あの子は・・・麦わらボーイは・・・ヴァタシのテンションホルモンを2回もうけてるのよ!あの技は体をだますだけのもの・・・だから今麦わらボーイの体はボロボロのはずなっしブル!」

サボはわかってた。でも、うそであつてほしかった。1回ならまだしも、この短期間で2回もうけていたなんて・・・。サボの口からは無意識に言葉が出ていた。

「ルフィとエースは俺の兄弟なんだ。どうして!!どうしてルフィに、そんな無茶させたんだ!2回も打てば、命の保証がないことくらい・・・わかって・・・いるはず・・・だろ?」

サボは言いながらだんだん声小さくなつていた。

分かっているからだ、イワンコフは止めたことが。

そしてルフィは自分がどうなるうが助けに行きたがつたんだろうということも。

分かっている。わかっているけど!悔しかった、ルフィはここまでやってきたのに

自分はぎりぎりには行けずに、ほとんどケガしてないことが。

そしてそれはエースも同じだった。

自分がティーチに負けたばかりに、ルフィをこんな目に合わせたことが・・・。

二人はルフィをこんな目に合わせてしまったことを悔しがりながら、ルフィが助かるように祈つたのだった・・・。

続く

2人の涙

トラファルガー・ローの手によって5時間かけてルフィの手術は無事成功に終わった。

だが、目を覚ますのは1週間弱かかるということだった。

そして、目を覚ましてからも1か月は絶対安静。今度傷が開いたら命の保証はないらしい。それほどルフィの傷は深く、残酷なものだった。イワンコフからルフィがマゼランの猛毒を体中に浴びて瀕死の状態だったと聞いたときは、ゾツとした。

エースとサボは、ルフィがすっかり休息をとれて、なおかつ海軍に遭遇しないようにするために革命軍の隠れ家に向かっていた。……その夜……。

「……………サボ……………」

ルフィの看病をしていたサボが、エースのほうに顔を向ける。

その時のエースの顔を、サボは忘れることはないだろう。

エースには似合わないほどの弱々しい顔をしていたからだ。

「すまない……俺はお前にルフィのことを頼まれていたのに、ルフィをこんな目に合わせた。サボだってつらい思いをしていたのに……俺は……俺は……お前を責めることしか……できなくて……！」

サボはエースのそんな言葉を聞き、エースの隣に座った。

そして、エースの頭を手で肩に寄せた。エースは驚き目を見開いていた。

サボはそのまま顔は前に向け話をつづけた。

「いいんだ。エースはいつでもルフィのことを考えてくれてるのは知ってる。今回俺が記憶を思い出したのも、エースがルフィを思う気持ちからじゃないかって思っているんだ。しかも、何の相談もせず旅出したのは俺だ。俺にだって非はある。だからエースがすべて抱え込む必要はないんだ。こうやってまた3人そろろうことができたんだ。俺だってルフィの兄だぜ？お前のその抱え込んでいるものを俺にも分けてくれよ、な？」

サボはそう言つて顔をエースに向けニツと笑つた。

エースはそれを見て、我慢していた涙が零れ落ちた。そしてそのままエースはサボにずっと言えなかつた気持ちを伝えながら泣き続けた。「生きててくれてありがとう」「助けてくれてありがとう」と……。

そんなエースにサボは「俺のほうこそ生きていてくれてありがとう」といつて、2人で朝まで、ルフィの前では流せなかつた涙を流し続けたのだつた……。

そんな中、シャンクスにより邪魔され目的をはたせなかつた黒ひげ海賊団はその腹いせにある計画を立てていた。次のターゲットについてだ。

船長であるティーチは1人の写真を船の壁に短剣で刺した。

その写真の人物が死ねば、シャンクスだけではなく自分にとって邪魔な存在が傷つくことが分かっているからだ。

ティーチは今回の作戦の邪魔をした奴らの悲しみにゆがんだ顔を想像しながら、大きな声で笑っていた……。

続く

変人3人組!?

エースとサボが泣いた日、イワンコフとボア・ハンコック、そしてなぜか“冥王”レイリーがルフィたちが向かっている島へと向かっていた。

「あくわらわの愛しきルフィにはよー会って、この食料を渡したいぞ！」

「まさかあの男嫌いが、ルフィ君を好きになるとは・・・ハハハ
彼はたくさんの人を魅了するな！」

レイリーの言葉を聞いて、ハンコックが驚いた顔をした。

「そなた！レイリーではないか！いや、懐かしいものじゃな！」

「今きずいたの!?!どんだけルフィボーイに夢中だつきやぶる：ふく。」

ハンコックがルフィに夢中で今まで一緒の船に乗っていた、レイリーにきずかなかったことにイワンコフがあきれていたとき、レイリーが本題に入った。

「にしても、ルフィ君の兄弟はどれもつわものぞろいだな。さすがと
いうべきか・・・。この革命軍の彼は、今革命軍のトップ5に入るんだろ？」

レイリーがイワンコフに問う。

遠くからは、ハンコックの「当然じゃ！ルフィの兄上様たちじゃぞ
！」なんて声が聞こえる。

「ええ、もうすぐみんな抜かれてしまいそうなくらいよ。」

にしても、麦わらボーイに聞いてた死んだ兄、それがサボだなんて・・・

よく考えれば、納得できるなぶるんだけど、なんだか実感がわかないわね。」

イワンコフはなんだか複雑そうな顔をしていた。

それもそうだろう。ルフィに死んだ兄がいることを聞いて、つらい過去を乗り越えてきたんだなと思ったら、その死んだはずの兄が同じ革命軍の同胞であるサボだったなんて。

しかも、サボは革命軍に拾われた時から記憶喪失だったのに、いつ

の間にか記憶を取り戻し、ルファイたちを救った。運命だと思えな
いほど、タイミングがそろいすぎている。

「ルファイ君もさぞうれしかっただろう。泣き喜んでる姿が容易に想像
できる。ハハハハハ」

レイリーはそう言いながら、頭でルファイの顔を想像したのだろう。
楽しそうに笑っていた。その横では妄想に入ってるハンコックが
いる。

イワンコフはこの2人をみて「変人がそろったわね」なんて自分の
ことを忘れたようにつぶやいた時、革命軍の隠れ家についた。

ルファイたちは先にきているようで、革命軍の一人である、コアラが
慌てた様子で走ってきた。

「大変なの！サボ君たちが・・・！」

コアラのその言葉を聞き、イワンコフたちはサボたちがいるとい
う家に駆けつけて行った。

中からは、ガシャンがしやんと食器の割れる音が聞こえている。

何事だと、扉を開いてみた光景は・・・

続く

レイリーの考え

イワンコフたち3人が部屋に入ってみた光景は……
想像もしていないことで、あつけにとられていた。

エース・ルファイ・サボは三人きれいに並び、ものすごい勢いで食べていたのだ。

だがそれだけではない、時には宴のように騒ぎ出し、時には驚くほど泣き出し、時にはお皿を投げながら怒り出していた。しかも三人寝ながらそろって同じことをしていたのだ。

そんな光景を見たら、部屋を飛び出さずにはいられないだろう。

「この子たちは人間なのか不思議なくらいきやぶるね……。」

コアラ「でしょ!?!サボ君のこんな姿見たことないよー!」

「ハハハ、綺麗にそろっている。さすが兄弟といったところか!」

おのおの驚いている中、ハンコックだけはもうすでに妄想に入っていた。

「あくルファイ!そんなに腹がすいておったのか、待っておれ、わらわの愛妻弁当をすぐに用意するからな?……キヤールファイーにおいていと言われてしもうた!これが世にいう”プロポーズ”!」

だが、すでに見慣れた光景になってしまい、ツツコむ人は誰もいなかった。

三兄弟はいつの間にか食べ終わったようで、倒れるように川の字になった。

そして、当たり前のごとくまだ……寝ている。

だが、三人そろって昔のことを思い出しているのか、幸せそうな顔をしていた。

その顔を見たら、心配する必要はないと誰もが安心して……。
その後、イワンコフたちはその部屋から出て行き、これからのことについて話し合っていた。

「で、ずっと不思議に思っていたのだけど、レイリー、ヴァナータはなぜ麦わらボーイを探していたの?」

イワンコフの質問を聞いて、レイリーはひげをいじりながら答えた。

「私はなこの”麦わらのルフィ”をとても気に入っているんだ。だから、これから先この新世界で生きていけるように修行をつけようと思つてここに来た。・・・なんせあの麦わら帽子があんなに似合うんだ。(小声)」

最後の言葉は誰の耳にも届かなかった。

そして、レイリー自身、思ったことが言葉に出ていることに気づいていなかった。

そんな中、今まで妄想に浸っていたハンコックが突然真剣な顔になった。

「さて！レイリー！確かに修行も大切かもしれないが・・・ルフィは仲間に出会ったがつっていたのじゃぞ?!仲間と合流させるのが先じゃ!!」

ハンコックは最初ルフィを仲間のもとへ行かせる予定だった。

だから、最愛のルフィの頼みを最後まで守るつもりだったのだ。

だが、レイリーは頭を縦にはなく横に振ったのだ。

「いや、ルフィ君はまず私と最低でも2年間はある島で修行してもらう。」

レイリーのその言葉にハンコックは怒りをあらわにしていた。

「なぜじゃ!!ルフィは仲間会うことを望んでおるんじゃぞ！」

仲間と合流してから一緒に修行すればよいではないか!!」

イワンコフはハンコックの言い分もわかると言いたげにうなずいていた。

ルフィと船を一緒にしたとき、仲間に出いに行くのを遅らせたといっていたのを覚えていたからだ。だが、レイリーは一步も引かなかった。

「ルフィ君の仲間にはそれぞれ戦い方のスタイルがある。それを私がすべて教えることはできない。それに、私はルフィ君たちを飛ばした張本人にそれぞれの方角に飛ばしたのかを聞いている。」

レイリーは言葉をつづけようとしたが、イワンコフによってふさがれてしまう。

「クマね!! ずっと気になっていたの! あの偽クマは何だつきやぶる!!」

イワンコフは自分の同僚が訳の分からないことになって戦争の時に混乱していた。

それが今になって、また出てきたのだろう。

そのことについては私から話すといつてイワンコフはコアラに連れられて、どこかへ行ってしまった。

「ゴホンツ! 話をつづけるが、クマはちやんと考えて飛ばしていたのか、偶然なのか、それは今になってはわからない。だが、運よくそれぞれのスタイルに合った島に飛ばされている可能性が高いんだ。」

「つまり、一人ひとりしっかりとレベルアップをして2年後くらいにまた集まるといふことじゃな。理解はできるが、どうやってそれをルフィの仲間に伝える気じゃ。ルフィの仲間もすぐにでも合流しよう」とシャボンディ諸島へ向かっているのではないか?」

ハンコックの問いかけにレイリーは自信満々の笑みを浮かべた。

何かしつかりと策を考えていたようだ。

「安心しなさい。そこはもう考えてある。」

ハンコックは不安に思うところはあったが、修行が先か仲間会うのが先かそれを決めるのはルフィ自身だと考えていた。

どっちを選ぼうとも、自分は最善を尽くすとハンコックは心の中で決めていた。

その覚悟がレイリーにも伝わったのか、成長した子供を見るようにハンコックを見ていた。

その後、ルフィはなかなか目覚めることがなく、食事にも手を出さなくなってきた。

エースもサボも日がたつにつれ不安が募っているのか、二人とも顔に疲労が見える。

最近はろくに寝ずに看病しているせいだ、目にはくまができてくる。

実はあのあと、ルフィは一度傷口を開いてしまったのだ。

出血は押さえても止まらず、しょうがなくエースの能力の火で傷口をあぶり、強引に傷を防ぐことで何とか一命をとりとめることができた。

だが、ルフィのお腹には大きなやけどの跡がバツ印のようについてしまった。

その傷あとは二度と消えることはないと思う。それが余計にエースとサボの心の傷を広げてしまった。そのためその日から二人は寝ることなく看病をつづけていた。

見ていられなくなったコアラは、二人に休むように言ったがその言葉が聞き入れられることはなかった……。

それから数日後：エースとサボの限界が近づいているとき、ルフィの手がわずかに動いた。

続く

ルフィの決断

ルフィはずっと夢を見ていた。

子供のころの夢だ。サボとエースと二人でいて、狩りをしてけんかして……

杯を交わして、兄弟になって……それはそれは楽しい日々だった……。

だがそれは突然現在に変わる……。

そう、エース処刑の時だ。この夢ではエースは自分をかばって死んでしまった。

大量の血を流し、ルフィにもたれかかるエース。だんだんと小さくなつていく声で「悔いはない」「愛してくれてありがとう」と言った……。ルフィは耳をふさぎ、涙を流しながら叫んだ……。「約束したじゃねえか！お前……絶対死なねえって！」……

ガバツ

「エーーーーーエース!!!」

ルフィは勢いよく起き上がった。

呼吸を荒らしながらも、周りを見渡す。

横を見ると、驚いた顔をしたエースとサボがいた。

「ル……ルフィ……。」

「よかった、目が覚め……たあ?！」

エースが言葉を言い切る前に、ルフィはエースに抱き着いた。

涙を流しながら、ひたすらエースの存在を確かめるように……。

その様子を見て、エース・サボは察した。

ルフィはエースが死んだ夢を見たのだと……。

エースとサボは顔を合わせて少し微笑んだ後、ルフィを抱きしめ返す。

「大丈夫だ。俺はここにいます。お前のおかげで生きてる。」

「そうだぞ、ルフィ。お前は頑張ったんだ。でも、俺の存在を忘れるなよ。」

二人の言葉を聞き、ルフィはゆつくり涙でぐちやぐちやになった顔を上げた。

「エッグ・ヒック・・・よ」がっだ。おれのせいで、エースが死んだんじゃなくて・・・本当に!!・・・サボも・・・生きてた・・・夢みたいだ・・・また三人で会えるなんて・・・!!」

その気持ちは、エースもサボも同じだった。

サボが死んだと聞かされたあの日から、何年たっただろう。

長かった。かなわない夢だと思ってた。それがかなったのだ。

うれしくないはずがない。

「俺たちも同じ気持ちだ、ルフィ!」

「ああ、こんなに幸せなことばねえ!」

ルフィは二人が同じ気持ちなことに喜びを感じながら、涙で濡れている顔に満面の笑みでうなずいた。

「うん!!」

そんな三人の姿を、陰でこっそりと覗いていたコアラたち一同。

イワンコフ、ジンベイ、そしてコアラはこの三人の再会に感動し、涙を流していた。

ハンコックはルフィがおきたことに喜び早速妄想を始めていたが、

そこはほっておくでしょう。

(この三兄弟は、世界を大きく変える存在となるだろう。これは修行が楽しみだな)

数年後、レイリーの言葉道理に三兄弟によって大きな大事件が起こるが、それはまだ誰も知らない・・・。

―数日後―

ルフィは驚異的な回復を見せ、いまではエースたちと昔のように狩りなどをしていた。

それはとても楽しく、昔に戻ったようで幸せだった。

だが、ルフィは仲間のことを考え始めていた。俺はこんなことをしていいのか、と。

「エース・サボ！俺、そろそろ仲間のもとに戻るよ！」

エースとサボはいずれそう言いだすと思っていた。だから、すぐにうなずいた。そんなとき、突然扉が開いた。

「その話、ちよつと待ってくれないか、ルフィ君。」

陰でこつそり聞いていたレイリーが、そう言っただけで入ってきた。

予想もなかったことで、三兄弟全員驚いた。

「レイリーのおっさん！」

その中で、エースは何やら気まずそうな顔をした。

自分がロジヤールの息子だからだ。レイリーはロジヤール海賊団に入っていて、しかもロジヤールの右腕だった男だ。エースはいてもたってもいられなく、部屋を出て行こうとした。だが、レイリーがそれを制した。

「エース君も一緒に聞いてほしい。君の気持ちもわかるが……ダメかね？」

エースは少しレイリーから顔をそらした。

「わかった。」

レイリーは三人を見て、うなずいてから話を進めた。

「これはあくまでも私の意見として聞いてほしい。ルフィ君、そしてエース君、君たちにはこれから2年間、私と一緒にある島で修行を受けてほしい。」

「……え……？」

「……俺も……？」

サボはレイリーの考えにきずいた。

自分は使える、だからサボはこの修行に入っていないのだ。

そう……”覇気”を……。

「ああ。これから先は強敵ぞろいだ。海軍大将たちも動くときがある。今回の戦争で、自分たちが一番分かっていると思うが……そんな世界で君たちが生き残れる確率はかなり低い。ルフィ君が今すぐ仲間と合流したところで、また黄ザル君に会ったら、君は勝てると思うかね??同じことの繰り返しになるだけだと私は思う。君たちはまだ、成長できる！だから、こんなところで死なせたくないのが私の

考えだ。」

ルフィはそれでも仲間に会いたかった。

だが、今回の戦争で自分がどれだけ弱いのが分かった。

自分が見た夢のように大切な誰かが死ぬくらいなら……

「わかった！俺、やるよ！仲間を守るなら！」

「ああ、必ず君を強くしてみせるよ。エース君はどうする？」

エースは正直迷った。仲間は無事な姿を見せに行きたい、そう思うと同時に仲間に合わせる顔がないと思ったからだ。

今回の戦争は、自分が招いたもの。あの時親父がとめたのを聞いていれば、こんなことにはならなかったのだ。

だが、それ以前に自分がもっと強ければ……ティーチに負けることはなかった。

「わかった。俺もやる。」

レイリーは満足そうにうなずいた。

そして、これからの説明をした。

「まずしなければいけないのは、仲間には2年間の修行のことをどうやって説明するのか……だ。エース君のほうは問題はないと思うが、ルフィ君のほうは仲間はバラバラなところにいるし、正確にどこにいるかが分からない。だから、私はこうやって伝えようと思う。」

レイリーの話を聞いて、ルフィはそれを実行することを決意した。仲間を守るため、これからも旅をつづけるために!!

続く

3D2Y

ザザーン

ルフィは今、仲間たちに集合日時を2年後だと伝えるためにマリンフォードへ向かっていた。ルフィの右腕には「3D2Y」と書かれていて、「3D」には？印がついている。

あの日からあまり日にちはたっていないので、回復したといっている包帯だらけの体。

とても痛々しかった。

そんな体であるにもかかわらず、ルフィはこれからのことを想像していたのか、それともこれまでの仲間との思い出を思い出していたのか・・・それはわからないが、とても優しい顔をしていた。

「ルフィ君！そろそろつくが・・・くれぐれも無理だけはせんように！」
「大丈夫だ！レイリーさんに俺たちもついてるんだ！」

そう言つてサボはエースのほうへ顔を向ける。

エースもいつもの力強い瞳をジンベイに向け、いった。

「ああ、だからそんなに心配すんな！ジンベイ！」

ルフィは全開の笑みを見せたかと思うと、すぐに真剣な顔に戻りレイリーたちみんなを見渡した。

「みんなありがとう！じゃあ、始めよう!!」

ルフィのその声の後に、全員で「おう！」といった。

そのころマリンフォードでは・・・。

「報告します!!軍艦が一隻!このマリンフォードに近づいています!!」

報告を受けた大佐は、身に覚えのないことに首をかしげる。

「なんだと!?今日軍艦が来るなど聞いていないぞ!どこの部隊だ!!」

「それが・・・麦わらのルフィです!」

大佐は勢いよく立ち上がる。

それもそうだ。海賊が意味もなくこの海軍本部でもあるマリンフォードに来ることなどないのだ。

しかもそれが麦わらのルフィであることにも驚きだ。

昨日のようにも思えるあの戦争が起きて、そんなに日がたつていないのに……

なぜまたここに来たのか、見当もつかなかった。

「なぜまた麦わらが!? まあいい。ここで奴を逃がすな! 撃ち落とせ!!」

理由はわからないが、海賊が自ら出向いてくれたことをチャンスと考え、大佐はそう命令した。だが、先ほどから何度撃つても当たらない……なぜなら……

「あの船にはほかにも大物が4人もいます! 火拳のエース、海峡のジンベイ、そしてあの戦争の時火拳と麦わらを助け、つい先日発覚したばかりの人物……革命軍サボ! ……あと一人は……冥王レイリーです!!!」

「レイリーだ?! なぜそれほど男が麦わらに手を貸す!?!」

海軍たち、そしてそこに取材に来ていた記者たちは大物たちの登場に動揺した。

しかし、大砲を打つ手を止めるわけにもいかず、撃ち続けていたが……それを余裕で通り抜けマリントフォードを一周すると、港へ入ってきた。

そこに構えていたのは、四方八方に置かれた大砲だ。

それによって、軍艦は大破したもののルフィ、エース、サボ、ジンベイ、そしてレイリーは上陸する。

「ひるむな! 迎え撃て!! 絶対に逃がしてはならん!!」

ジンベイ「ルフィ君たちはさっさと行くんじゃない! ここはわしらに任せとおけ!」

海軍が襲ってくる中、ジンベイがそう言った。

ルフィたち三人は「ありがとう!」と言って目的の場所へと移動し始める。

「なぜだ! なぜ麦わらに手を貸した! 冥王レイリー!!」

「懐かしい名前と呼んでくれるな。私は期待しているのだよ。この世界を変えるであろう……あの三兄弟を……!」

三兄弟・・・その言葉に聞き覚えがなかった海軍や記者からはざわめきの声上がる。

だが、そこはさすが大佐というべきか、一足先に理解した大佐がみんなの動揺をなくすように答えを言った。

「革命軍のトップ5に入るあのサボという男も麦わらの兄弟というところか・・・!!これで納得がいく。ガープさんがあれだけ動揺していた理由が：！どれだけ聞いても教えてくれなかったが、そうか・・・まったくもって迷惑な三兄弟だ!!」

そこからは早かった、三兄弟の勢いは止まらない。

海兵たちをいとも簡単になぎ倒し、目的の場所OXベルへたどり着いた。

三人でひもをしっかりと握り、ゆつくりとベルを16回鳴らした。

その後、亀裂の前に三人並んで立ち、花をそこへ投げる。

帽子を取り、目を閉じた。

カシャツ・・・カシャツ

シャッター音が鳴り響く。記者たちは一生懸命三兄弟の写真を撮っている。

その音に満足したのか、三兄弟はレイリーたちのもとへ戻り、ジンベイザメに乗って帰っていく。

この時取られた写真は、次の日の新聞に大きく取り上げられた。

見出しは「発覚!!最強最悪の三兄弟!!」だ。

誰もが驚き、誰もが思った。

「どんな兄弟だ!!」

と・・・。

一人は、ドラゴンの息子であり3億ベリーの賞金首である麦わらのルフィ。

一人は、ロジャーの息子であり白ひげ海賊団2番隊隊長である火拳のエース。

そして一人は、ドラゴン率いる革命軍トップ5に入る参謀長サボ。どれも海軍にとつては危険な人物である。海軍からしてみれば、大変なニュースであることには変わりなかった。

「どうなつちよる!!危険因子であるこの三人が兄弟じゃと!?!」

「うくん。こりや驚いたね〜。」

「あー・・・すごい兄弟がいたもんだ。」

さすがの海軍大将たちもこれには驚いた。

そして、この三人が今後この世界に海軍にとつて大きな悪影響を及ぼすことも直感していた。なので、その翌日海軍内で大規模な会議が行われることになるが・・・その会議の発表がされるのは、まだ、先の話・・・。

この記事を見て、麦わらの一味全員が驚き、安堵した。

各々ルフィの意図に気づき自分たちもこの場所で力をつけることを決めた。

ゾロは鷹の目のミホークから剣の技術を盗むことを。

ウソップはその島特有の植物について研究および武器化にすることを。

サンジは戦い強くなりながら、仲間のために料理のレシピを力づくで奪うことを。

ナミはそこで天候化学を勉強し、自らの力にすることを。

チョッパーはそこで仲間の命を助けるために医学の勉強をすることを。

ロビンは革命軍のもとへ行き、いろんな情報及び力をつけることを。

フランキーはベガパンクの研究所でいろんな知識を盗み、自らの力にすることを。

ブルックはいろんなところで歌を歌いながら、力をつけることを。

「「「「2年後に!!シャボンディ諸島で!!!」」」」」

続く

修行スタート!

三兄弟によって行われた異例の事件。

それが行われた数日後、サボはある船にいた。

そこはルフィやエースがいる船ではない。

大海賊であり、エースの2人目の父親である白ひげの船だ。

なぜここにいるのかの言うど・・・誰が白ひげにエースが修行のため約2年間戻ってこないことを伝えるに行くのか、という話が出たときにサボが真っ先に名乗り出たからだ。

「親父！エースのもう一人の兄弟、サボが来たよい！」

マルコの案内によって白ひげの前に来たサボ、普通初めて会ったものは、恐怖するところだ。だが、さすが史上最悪の三兄弟の一人、ルフィ、エースと同じく初めて会ったのにもかかわらず恐怖の色は全く見えず、まるで昔からの親友に会いに来たかのようにだった。

「エースの兄弟か・・・ほかの2人と一緒にいい目をしてるな。で、俺に何の用だ？」

「俺はエースからの伝言と、兄弟としてお礼を言いに来た！」

サボの言葉を聞き、周囲がざわついた。

「どうゆうことだよい!!伝言って・・・エースは帰ってこねえのか!？」

マルコは我慢できずにサボに聞いた。だした。

「ああ、エースはこれから約2年間、冥王レイリーのもとでルフィと一緒に修行することになった。」

「・・・そりや随分となげえ時間だな。だが、伝言もあるということ、それはエースが決めたことなんだろう。子供が覚悟をもって決めたことなら、親は黙って見守るさ・・・で、伝言を聞かせてもらおうか。」

サボはその回答に満足したのか、大きくうなずいた。

そして、エースから白ひげに伝えてほしいといわれていた言葉を言った。

「親父・・・そしてみんな・・・今回は俺のわがままのせいで迷惑をかけ

てすまなかつた。そして、俺の父親が誰かわかってても、拒絶しないでくれて・・・助けてくれて・・・ありがとう・・・。これがエースに伝えてくれと言われた言葉だ。」

エースの伝言を聞き、空気がシーンと静まり返った。

みんなにエースの気持ち伝わったのだろう。

涙を流すものもいれば、当然だと胸を張る者もいる。

さつきまで声を上げていたマルコも、エースの気持ちが痛いほど伝わったのだろう。

顔を下に向け、涙を必死にこらえていた。

そんな中、白ひげがサボにエースに伝えてくれと言って、いった。

「お前の親が誰であろうと、最悪の鬼であろうと、この旗を掲げてるやつはみんな俺が親なんだ。息子のわがままくらい聞いてやる。息子のピンチぐらい救ってやる。だから、こつちのことは気にせず自分の思う通りに動けばいいってな。」

「・・・ああ・・・必ず伝える・・・！」

サボは小さいころ、エースと一緒にいたため、エースがこの言葉を聞き、どれだけ救われるかがわかるのだろう。涙声になりながら言った。

それからサボは白ひげにお礼を言って、船を後にした。

そのころ、とある島では・・・

「レイリー！どの島で修行するとは聞いていなかったが、この場所は危険じゃ！命を落とすぞ!!」

「危険でなければ意味がない、これは修行だ。もし命を落としたとしても、この島で生き延びられなければ、この先どこかで命を落とす。」

ハンコックとレイリーが言い争いをしていた。

だが、ルフィとエースにとってこの島は、好奇心の塊だった。

あらゆる四季が短期間で訪れ、凶暴な怪物がいるこの島。

ルフィたちはレイリーたちを置いて、さつきと中へと入って行って

しまった。

「レイリー先行くぞ!!」

「ルファイ!どつちが大きい怪物を捕まえるか勝負だ!!」

「おう!!望むところだ!」

そんな会話をしながら走り去っていく兄弟を見て、言い合いをしていた二人と付き添っていたジンベイは少し微笑んだ。

あの戦争でもし、ルファイの夢通りに言っていたら二度と見る事がなかった光景だ。

そう考えると、ルファイたちが楽しそうなら、それでいいと思えるようになった。

「あくルファイがそれでいいのならいいのじゃぞ。ではわらわは食料を・・・」

「ルファイ君たちのためにそれはやめてもらおう。ここはジャングル。自分で食料を調達しなければだめだ。これからの彼らのために・・・!」

ハンコックはルファイという言葉に弱い。

ルファイのためにと言われてしまったら、もうわかったとしか言えなかった。

そして、ルファイたちのことはレイリーに任せ、ハンコックとジンベイは去っていった。

「見ろ!エース!!俺のほうがでかいしうまそくさる!!」

ルファイは倒した巨大なサイをエースの目の前においた。

だが、エースはそれをあざ笑うかのようにルファイの倍はあるクマを連れてきた。

「まだまだ俺のほうが上だな!ルファイ!」

エースが連れてきたクマをみて、悔しがっていたルファイ。そんなとき、ハンコックたちを見送ったレイリーがきた。

「ルファイ君!エース君!修行を始めるぞ!!」

ルファイとエースは一気に顔を引き締めた。

「おう!!」

続く

海賊 麦わらのルフィ

「エース!!見てろよ!!武装色、硬化!!」

ルフィがそう言うと、ルフィの腕がみるみる黒くなっていった。

だが、エースは鼻で笑った。

「攻撃して来いよ。ルフィ。」

その言葉を聞いたとたん、ルフィはエースに攻撃をする。

エースはルフィの攻撃に臆することなく、あろうことか目を閉じた。

そして、余裕で攻撃をかわす。

ルフィは、驚いたが、さらに攻撃をする。

「ギア2。ゴムゴムのくくくジェットガトリングくくく!!」

だが、ルフィの最速の攻撃をもってしても、エースに攻撃が当たることはなかった。

「まだまだだな!ルフィ!」

エースはルフィと同じように腕に覇気をまとい、ルフィに攻撃した。

「いっつつつつつつてくくくくくく!!!」

命中だ。

その時、急に横から声が聞こえた。

レイリーではない者で、2人にとつてとても大切な人だ。

「ハハハッ、ルフィも強くなったけど、まだエースのほうが上だな!」

「サボ!!」

「当然だな。まだまだルフィには負けねえよ!」

「にしても、この短期間でここまで覇気ができるようになるなんてな・・・さすが俺の兄弟だな!」

サボの言葉を聞き、照れる2人。

その姿を見て、サボは幸せを感じていた。

生きててよかった、記憶が戻ってよかった、この二人に出会い兄弟になれてよかった、そんな気持ちだが、サボの中で渦巻く。

たとえ世界から最強最悪の三兄弟と言われようとも、この世界の危

険因子だとしても、サボたちにとっては誰を犠牲にしても、守りたい存在。

サボは心の中で、1つの誓いをたてた。

(この先、2人が危険に陥れば立場を無視してでも必ず助け出す！命をかけて!!)

そんなとき、レイリーが三人の前に現れた。

「おおー最強最悪の三兄弟がそろってるじゃないか！ハハハ」

レイリーは三人がそろっていることに、とても満足そうな顔をしていた。

どうやらレイリーはサボにも修行を見てほしいと思っていたようだ。

それを承諾したうえで、サボはエースにつき、教えることになった。とはいっても、エースはほとんど覇気を習得している。

なので、手合わせすることになった。

「よしーじゃあやるかー！」

「おう!!」

「武装色、硬化!!」

二人同時に覇気を腕にまとい、手合わせが始まった。

だが、レベルが高いため島には振動が起こる。

そのころ、ルフィはこの振動を感じ、燃えていた。

「エースもサボもすげえな！俺も負けられねえ！よろしくたのむ！レイリー!!」

「ああ、任せたまえ。」

(サボ君とエース君が一緒にいてくれてよかった、競い合ったほうがルフィ君に気合が入る)

「さあ、始めよう!!」

ルフィたちが修行を初め、あれから2年たった。

エースは半年前には覇気の修行をすべて終え、白ひげのもとに戻っているし、サボは革命軍の任務が、レイリーもルフィが覇気を習得し

終わった時にシャボンディ諸島へ帰っていた。

今この島にいるのはルフィと野獣たちだけだ。

ルフィは今ではこの島のボスになっていた。

それだけ、覇気が強くなった証拠だ。

あと少しで、ハンコックたちが迎えに来る。

ルフィは、麦わら帽子の前に立っていた。

「この2年間、いろんなことがあったな……。エースやサボと少しの間だけど、一緒に過ごさせて楽しかった……。よし！海賊麦わらのルフィ!!再開だ!!」

この2年間の間で、麦わらの一味の名を知らぬ者はいなくなった。

特に船長であるルフィは、父親が革命軍ドラゴンであること、兄弟が白ひげ海賊団2番隊長エースと、今となつては革命軍NO，2であるサボであることで大きな話題を呼んだ。

これからも、麦わらのルフィを中心に様々な事件が起きるだろう。

ルフィたちの物語は……。まだまだ……。まだまだ……。続

く……。!!

再集結！麦わらの一味！&集結！偽麦わらの一味！

「ルフィ？わらわたちが送れるのはここまでじゃ、変装の準備はよいか??」

ルフィはハンコックに言われて、フードを深くかぶりつけひげをつけていた。

「おう！でもこのひげジャマだなくなんかムズムズするぞ！」

「我慢するのじゃぞ、ルフィ！ソナタが現れたことを知られば、出航は難しくなるのじゃからな！……あとルフィの大好物をたくさん詰めたお弁当もどうか持って行ってくださいまし？」

そう言ってハンコックはぎゆうぎゆうになったリユックをルフィの前に出した。

大きさは尋常ではない。だが、ルフィは気にせずほくほく顔で背負った。

「ありがとうー！ー！またなー！ー！！……みんな元気にしてるかな？楽しみだなく！」

そう言って、ハンコックの船を離れ、1人シャボンディに向かっていった。

少し時をさかのぼり、シャボンディ諸島では……

「くそー！なんでついてそうそう最初に会ったのがレディたちじゃなくて、お前なんだよ！くそ剣士!!」

「その言葉そのまま返すぜ!!くそコック!!」

2人の海賊がものすごい勢いで歩いていった。

この2人は同じところに向かって向かっているのだが……なぜかお互いに負けたくないのだろう。追い越し、追い越されながら早歩きで歩いていった。

すれ違う人々が皆、驚き振り返るほどだ。

そしてついに、目的の地が見えてきた。

シャッキーのぼったくりバーだ。

ばん!!カランカラン

「俺が先だ!!!」

中にいた、レイリー、シャツキーは勢いよく入ってきた2人に驚いた。

「おお、なんだゾロ君にサンジ君じゃないか、元気そうでなによりだ。」

レイリーの声に2人は我に返った。

「おう、なんとかかな。」

「俺は死ぬかと思っただぜ・・・で、ほかの人は？」

サンジの質問にはシャツキーが答えた。

「あなたたちが1番よ。」

「へ、じゃあ俺が1番でひげ眉毛は2番だな。」

「なにー!?逆だ逆!!まよりもが1番だと出航の海があれぞ!」

「なんだとー!!」

シャツキーの答えを聞いて、もめだした2人。

そんなとき、間に入ってきたのはナミだった。

「やめんか!ゴラツ!!」

まともにナミのパンチを食らった2人。

このやり取りは、2年前と変わらず相変わらずのようだ。

ただ、一つ違うのは・・・サンジの女性に対しての免疫が激減していたことだ。

「ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナミスワーーーーン!!!ブウ~~~~~!」

ナミの姿を見た瞬間、サンジは鼻血の噴水という名の大出血で倒れてしまった。

なんとも・・・幸せそうな顔だ。

「え?サンジ君?!大丈夫なの!?!これ!」

初めてここまでの大出血を見たナミは慌てていた。

ゾロはちよつとひいているようだ。

そんなことが起きて、焦り声と笑い声が聞こえるシャツキーのぼつたくりバー。

数日後にチョッパーが到着し、サンジの状態をみて驚くことは言わずとわかることだろう。

ロビンが到着し、ナミと一緒にショッピングに出かけるととき、目の前に麦わら帽子をかぶっている太めの男と、三本刀をさげて緑色の腹巻をしているこれまた太っている男と、煙草をくわえて黒いスーツをまとっているガリガリの男、3人が道のど真ん中を胸を張り偉そうに歩いている。

「ねえロビン、あれってもしかして、ルフィたちのまね?」

「そうみたい、だけどあれでまねできているつもりなら、頭がどうかしてるわ。」

そんなことを小さな声で会話をしていると、偽ルフィとナミの目が合ってしまった。

「おい、その女組2人! いい女だな! この先の酒場で俺らと一緒に飲もうぜ! 光栄だろう? このドラゴンの息子であり! 火拳のエースと革命軍NO.2・サボの弟である! 麦わらのルフィ様と飲めるんだからな!! ガハハハ!!」

偽ルフィの誘いにナミはため息をつき、ロビンは冷たい目をしていった。

「はあ・・・いいこと教えてあげる。麦わらの一味にはね・・・」

もくもくもくもくもく　　バチバチバチ　　ドゴゴゴゴゴゴゴゴ
ン!!!!

偽ルフィたち3人組の上に盛大な雷が落ちる。

「あんたたちみたいなクズはいないのよ。・・・行きましよう。」
「ええ。」

ナミは雷が落ち、倒れている偽ルフィたちにそう言い放ち、ロビンと一緒に去っていった。

その後、動けるようになった偽ルフィたちは怒り狂っていた。

「探せーオレンジ髪と黒髪の髪のなげー女2人組を! この麦わらのルフィを怒らせたこと後悔させてやる!!」

偽ルフィは自分の仲間にならぬとそう指示した。

指示を受けた仲間たちは急いで探しに走っていった。

その時、偽ルフィはあるところに向かっていた。

「どうした? ルフィ? なんかあったのか?」

「そうなんだ！聞いてくれよ！女2人組が俺たちをコケにしやがったんだ！」

「そりや命知らずなやつらだな。ルフィのバツクに俺たちがいること忘れてるんじゃないのか??」

そこにはオレンジ色の帽子をかぶり、背中に白ひげ海賊団のマークを付けた顔がぼこぼこしている男と鉄パイプを持ち、紳士的な服装をしている胴長短足の男がいた。

その2人は立ち上がり、動き出した。

「行こうぜルフィ、俺たちが・・・この火拳のエースと革命軍参謀総長サボが思い知らせてやる!!」

ついに偽最強最悪の三兄弟、ここに集まる!!

く

続

ルフィ到着・・・からの遊び

偽最強最悪の三兄弟が動き出したとき……

フランキー、そして、少し後にウソップが到着していた。

「スーパーー!!!久しぶりだなてめえら!!!」

「ほんとだぜ! ってサンジはどうしたんだ? チョッパ。」

ウソップは、目をハートにして倒れているサンジと、それを看病しているチョッパーに気づいて言った。それに対しての答えはすこしあきれ気味だった。

「わかんねえ。なんかサンジの奴の女に対する免疫力が激減しているんだ。女を見ると鼻血が大量に出てこのざまだよ。」

ウソップは少し苦笑いをした。

そこで、少し久しぶりの会話をすると、フランキーはサニーの様子を見に行った。

そんな中、ブルックは……

たくさんのお客に囲まれながらライブをしていた。

「みんな!! 今日は大変な話があるんだぜ!」

ブルック・・・いや・・・ソウルキングの言葉に観客の甲高い声援がやむ。

「ソウルキングは今日、このライブをもって引退・・・するんだぜ。」

数秒後、観客のやめないで! という声があちこちからあがる。

中には、涙を流し膝を落としたものもいた。

「ありがとう。だから今日は今まで以上にサイコーのライブをしようぜ!!!」

「!!!」「うおおおおおおおおおおお!!!」「!!!」

バンツ!!

「そこまでだ!!」

観客の甲高い声援がなっている中、突然扉があき大勢の海兵が現れた。

周りがざわつく。

「ソウルキング……いや、鼻歌のブルック!! 貴様が麦わらの一味であるという情報が流れてきた!! このライブは中止し、直ちに連行させてもらおう!!」

海軍のこの言葉に観客たちのざわつきがさらに大きくなった。

「うそーソウルキングが海賊!!」

「いやー……そんなの嘘だといって! ソウルキング!!」

そんな中、ブルックは特に慌てる様子もなく、楽器を鳴らし始めた……。

ブルックが音楽を鳴らし始めたころ……

ルフィは島に到着していた……。

「いやー! 懐かしいなー! 早くあいつらに会いてえな!」

そう言っつて、シャツキーのぼったくりバーを指して歩いていた。すると、ルフィの目の前に見たことがある服装を着た2人組が歩いていた。

外見はだいぶ違うが……ルフィは全く気付いていないようだった。

「あれえ!? エース! サボ!! お前らなんでここにいるんだ!?!」

声をかけられた2人組は、声を頼りにルフィの顔を見る。

だが、変装しているし、まさか本物がいるとも思っていないので、顔をかしげていた。

「誰だ? てめえ……俺らのことを呼び捨てで呼ぶなんて、いい度胸してるな!」

偽エースの言葉を聞き、ルフィまで首をかしげる。

「俺のことわかんねえのか? あーこの変「グアツ!!」そ……う?」
ルフィがしゃべっている最中に突然目の前の2人が吹き飛び、かわりに同じような服装だが、違う2人組が目の前に現れた。そして、息をあげながら必死の形相でルフィの顔を見て怒鳴り散らした。

「こんなやつと俺を見間違えるんじゃねえ!! ルフィ!!」

そして、ルフィに拳骨をくらわせた。

「イツテくくく!!あれ!?エース!サボ!」

ルフィは倒れている偽兄と目の前にいる本兄を交互に見る。

「2人もいるー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

ルフィが驚き叫んだと同時にまたエースとサボから拳骨が降ってきた。

その後・・・エースとサボから、偽麦わらの一味がこのシャボンディにいると説明を受けていた。

「あいつら偽物だったのかういやくそつくりだな!!」

「どこがだ!!」

「エース・・・俺、ルフィが心配になってきた・・・」

「あははははははははははは!!」

そんなほほえましい会話をしていたとき、偽ルフィがきた。

エースとサボは急いで正体を隠すためのマントを着る。

「おい!お前ら!この俺様の兄弟に何してくれてんだよ!ああ!」

偽ルフィは目の前にいるのが本物とはいざしらず・・・突っかかってきた。

ルフィは即座に倒そうとしたが、それをエースが止めた。

「何でとめるんだよ!」コソコソ

「だって面白そうじゃねえか!ものまねやろーがなにをやらかすのか!ビビったふりしてついていこーぜ!」

コソコソ

エースがルフィを止めた理由を聞いて、三人の口角があがる。

それを合図にしたかのように、サボがどこかに電伝虫で連絡し、偽ルフィに捕まったふりをして3人おとなしくついていった。

その連絡を受けたのは・・・革命軍であるコアラだった。

「この要件人間がー!ー!ー!ー!ー!」

そう、面白そうだからルフィとエースと一緒に偽麦わらの一味のところに行ってくる!ロビンにそう伝えといてくれ。とサボに言われ、すぐに偽麦わらの一味のもとに海軍が来ていることを伝えようとしたのに切られてしまったコアラはそう叫ばずにはいられなかった。

三兄弟の攻撃

コアラからルフィの居場所というか行動が分かったナミは肩を震わせていた。

「あんの・・・馬鹿!どうなってるのよ!三兄弟の頭の中は!!」

「ナミさん、わかるよその気持ち・・・。サボ君なんていつも要件だけ言ってるの言うことなんて聞かないんだから!」

ナミの怒りに賛同できるコアラは一緒になって愚痴りだした。

これがしばらく続きそうだったが、ロビンが止めた。

「ナミ、コアラ、今は落ち着いてどうするか決めましょう。」

ロビンの言葉に一度ため息をついて落ち着かせたナミは、次々に指示を出し、出航がすぐにできるように準備を始めた・・・。

そのころ、問題のルフィたちは・・・フードを深くかぶって笑ってしまうのを必死にこらえていた。

ルフィたちの前には偽麦わらのルフィが歩いていて、後ろには目を覚ました偽エースと偽サボが拳銃をルフィたちに突きつけながら歩いていた。

「おら!早く歩け!」

「怖いのか!?怖いんだろう!体が震えているぜ!ヒヒッ」

「ガハハハハ!この最強最悪の三兄弟にたてついたこと後悔してるってか!ガハハハハ!」

笑いをこらえて震えているのをそう思い込んでいい気分になつている偽三兄弟に、余計に笑えてきたのか、震えが激しくなっている。

「は、腹いてえええ (コソコソ)」

「こらえろ・・・ル、フィ・・・ククッ (コソコソ)」

「こら、二人とも、ここで笑ったら・・・ククッ・・・ばれるだろう (コソコソ)」

「お前もな (コソコソ)」

そうしてこらえている間にいつの間にか大勢集まった広場に来ていた。

周りに隠れて海兵がいるが、三人は笑いをこらえるのに必死で気づいていなかった。

「おい、お前ら聞けーーーーー!!この三人組が、俺様の兄弟にたてつきやがった!!よって、喜べ!ここで公開処刑を行う!!!ガハハハハ!」

偽麦わらのルフィの言葉に、そこに集まった海賊たちが次々と叫び始めた。

「さすがだぜ、麦わらのルフィ船長!!」

「俺あ、あんたについてくぜ!!」

「!!!」

その瞬間、ルフィは噴出した。・がエースとサボが必死に口を押える。

その行動に不信を抱いたものはいたが、ただ泣き崩れた仲間を支えているようにみえたらしく、気にも留めていなかった。

「最後に言い残すことはあるか?俺様は優しいからな!ガハハハ!」

そんなセリフを偽ルフィが言った。・。・すぐ後に爆発音がその場に響いた。

その爆発音に笑いが収まった三人はようやく海兵があちこちにうじゃうじゃいることに気づく。

「しまった!海兵が集まつてる!」

「俺たちの存在が知られたらまずい!さっさとここを離れるぞ!」

「わかった!」

ルフィたちがコソコソと動き始めたとき、パシフィスタをひきいた戦桃丸がすでにルフィたちを感知していた。

「ほう、火拳のエース、革命軍参謀総長サボもそろっているのか。」

「行け!麦わらの一味をとらえろ!!」

「!!!」

次々と海軍が攻め込んできて、そこはすでに戦場とかしていた。

海軍と海兵の実力は互角と思われたが、そこにパシフィスタが加わり、一気に海軍優勢となった。

「ルフィ船長!助けてください!!パシフィスタが。・。ああああ!!」

「そうだ！俺たちには麦わらの一味がいるんだ！」

「ルフィ船長!!ルフィ船長!!」

そんなコールがおこり、海賊たちの視線はさつきまで偽ルフィがいた場所に注がれた。

が、そこにすでに偽ルフィたちはおらず、視線を左に移すとコロコロと逃げている偽麦わらの一味がいた。もちろん、戦桃丸もそこに視線を向けていた。

「あいつらが麦わらの一味だど？笑わせる。PX5、あいつは誰だ。」
戦桃丸の呼びかけに答えたパシフィスタは偽麦わらの一味のほうに顔を向け認証を始めた。

—海賊、デマロ・ブラック・・・懸賞金2千600万ベリー・・・

「「「なにー！ー！？」」」

「はつだますほうも馬鹿だが、だまされるほうも運の尽き！全員ワイらが連行する！」

偽物だと気づいた海賊たちは急いで逃げ出す態勢に入る。

が、次の戦桃丸の言葉に動きがぴたつと止まる。

「そしてどういうわけか、本物の麦わら、火拳、革命軍もこの場にいる。」

えっ・・・という声が一斉に海賊たちからもれる。

「そいつを狙え！PX5!!」

「来るぞー！」

「おう!!」

ルフィたちは、PX5の攻撃を軽々とよける。

するとルフィの変装のひげ、三人のフードは頭から離れ、顔が丸見えになってしまった。

「て、手配書と・・・」「同じ顔——!!!」

「あいつら、本物の最強最悪の三兄弟だったのか——!!」

次々と驚きの声上がる。

「麦わら!!」

呼ばれたルフィは声の主のほうに顔を向ける。

「あ！お前まーた俺の邪魔をすんのか!？」

「なんだ？知り合いか？ルフィ。」

「そうなんだ！聞いてくれよ！あいつ2年前も俺の邪魔を・・・」
ルフィたちが戦桃丸のことについて話していると、話の途中で遮られた。

「そこで俺を無視して、兄弟で会話してんじゃねー！PX5！
PX6！PX7！あいつらを仕留めろ!!」

パシフィスタ3体がルフィたちに迫りながら、攻撃してくる。

「おせえ」

「ギア2。ゴムゴムの・・・」

「行くぞ!!」ボウツ

「ああ！竜爪拳・・・」

「ジェットピストル!!」

「火拳!!」

「竜の息吹!!」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!!

「」「」パシフィスタが一撃—————!?!「」「」

続く

麦わらの一味 再スタート 前編

「全員・・覇気をまとって・・!!」

戦桃丸はパシフィスタが一撃でやられてしまったことに呆気にとられてしまった。

エースとサボだけならまだしも2年前、パシフィスタ相手に手も足も出なかったルフィまでもが一撃で・・しかも覇気を使った戦いをしてきたからだ。「なぜ?!?どうやって!?!」そんなことを考えていた戦桃丸はルフィたちが走って逃げていつているのをその張本人に話しかけられるまで気づかなかった。

「じゃーなー!お前とはまたどこかで会いそうな気がする!」

「!!さて!麦わら!!」

制止を無視し、逃げるルフィたちを急いで追いかけようとした戦桃丸だったが、2年ぶりに聞く声が耳に届き足を止める。

「おー!ー!ー!ー!い!!ルフィー!ー!ー!ー!ー!!迎えに来たぞ!ー!ー!!」

「つたく、うちの船長はどうしてこうも世話をやかせるんだ。」

その声の主はゾロとチョッパーだった。

どうしてこの二人がここにいいのかというと・・・

―数時間前―

「ナミ、コアラ、今は落ち着いてどうするか決めましょう。」

このロビンの言葉に落ち着きを取り戻したナミは、ルフィのもと誰を向かわせるのかを考えた。ルフィを迎えに行くのと同時進行でブルックを迎えに行き、さらには出航の準備も整えなければいけないからだ。

ブルックのほうはなぜか話を一緒になつて聞いていたトビウオライダースが引き受けてくれたが、ライブ会場のドームに空から突撃するにはウソップの狙撃の腕が必要なためウソップもいかなければならなかった。そして、出航準備には航海士のナミ、船大工のフランキー、あと急いで荷物を運ぶためロビンの能力もほしかった。ルフィのところには本当ならばサンジを行かせたいのだが、あいにく目を覚

ます気配はない。そしてその付き添いに船医であるチョッパ―はつかせておきたい。

そう考えると消去法でゾロしか残らないのだが……。

「ゾロ……あなたこの2年間で方向音痴がなおってるってうれしい情報あつたりするかしら?」

「あ?俺は元から方向音痴じゃねーよ。」

「あら、そう。じゃアルフィのところまでどうやって行く?」

「どうって……騒ぎが大きいところに行くんだよ。」

ゾロのその答えにため息が出るナミ。

「これはゾロ一人ではいかせられないわね。どうしよう!」

ナミが頭を悩ませているとコアアラから手が上がった。

「はい!ナミさん、私が一緒に行こうか?元をたどればサボ君にも原因はあるんだし……。」

ナミは顔を笑顔にして、「ありがとう!助かる!」といおうとしたが、また頭を抱えだした。

(どうしよう。すつごくいい案だと思ったんだけど、誰かと一緒にいても変な方向に走り出すゾロなのに一回も一緒に行動したことがないコアアラが行ってもきつといつの間にかゾロがいなくなっている未来が簡単に想像できる!もう!どうしたら……。)

「ごめんコアアラ、うれしいんだけど……このバカは想像以上のバカだからそれでも迷うわ……きつと……。」

遠くで怒り出しているゾロの言葉をBGMに聞きながら、目を閉じて考えたナミの答えは、サンジに目隠しをしてこれ以上の悪化の原因をなくすという方法をとり、手の空いたチョッパ―にゾロを乗せていさせるのが一番リスクが少ないという答えが出た。

「チョッパ―!ごめんね!あのバカと一緒に行ってきてもらってもいい?」

「おう!わかったぞ!ナミ!」

—現在に戻る—

ということがあつたからだ。

「おお！ゾロ！チョッパ―！やっと会えた！！久しぶりだな！おめーら！！」

ルフィがゾロとチョッパ―に声をかけながら走っていくその後ろに並んだ兄二人はこんな会話をしていた。

「へえ、あれがルフィの仲間か！あの生き物はなんだー!?」

「俺は一回あったことがあるけどな！ほんとおもしろーぞ！ルフィの仲間はよー!」

「へーそれは会うのが楽しみだ!」

そんな中久しぶりの再会を打ち破る戦桃丸の怒鳴り声が響く。

「ロロノア！くそっ！やはりお前も生きていたか！PX8!!」

戦桃丸の声に合わせパシフィスタがゾロたちのもとへ向かってくる。

「おおおおおお!!きききききたぞゾロ!!どどどうする!?!」

「……………」

無言でチョッパ―の上に立つゾロ。

「このまままっすぐ走ってくればいい…………。それで…………十分だ。」

「…………おう！わかった!」

チョッパ―はこの時ワクワクしていた。

久しぶりの仲間との共闘、2年前にとまった時間がようやく動き出したようなそんな感覚。何度も夢に見た。この時を。短いようで長かった2年間。血のにじむような努力は今！ここから！このシャボンディ諸島から！新たな冒険をするため！仲間を守るため！チョッパ―は自分の上でぞろが剣を抜く音を聞きながらそんなことを考えていた…………。

麦わらの一味…………再スタート…………!!!

続く

麦わらの一味 再スタート 中編

シャボンディ諸島の一角。

海賊、海軍が皆そろってある一点を見ていた。

そこには3本の刀を振るい大きなロボットを切りつけている、トナカイに乗っている剣士が一人……。

そのロボットは大きな音をたて、爆発する。

「む、麦わらの一味だー！ー！ー！！偽物と全然違う——！！」

「おいルフィ、お前は9番だぞ。」

「ゾロ！今はそんなこと言ってる場合じゃねえ！早くいかねーと！！」

驚く海賊、海軍を置いて慌てて走り出すルフィたち一行。

その最後尾にはもちろんエースとサボもついていく。

「やるな！あの剣士！」

「ああ！俺たちも負けてらんねーな！」

走りながら仲間に会うのが楽しみなルフィは「楽しみだなー」「早く会いてーなー」とつぶやく。そんなルフィが急にピタリと走る足を止める。

「ルフィ？」

「おい、どうした？」

ルフィの視線の先にみんな目を向ける。

すると、ルフィの意図に気づいたのかそれぞれ口角を上げる。

大きく息を吸い込むルフィ。

「すうううう……レイリー……！！！！」

その人物の名前に驚きルフィたちを追いかけていた海軍も思わず足を止める。

ルフィの横にはいつの間にかサボとエースも来ていた。

微笑むレイリー。

「一応様子を見に来たが……問題なさそうだな。さらに力が洗練されている。」

「ああ！」

ルフィの横で2人もうなづく。

「では、早く行きなさい。仲間たちのもとへ・・・。」

「うん！レイリー！2年間！本当にいろいろありがとう!!」

「はは、あらたまるガラじゃない・・・早く行け！」

静かにリュックを下ろし一歩前に入るルフィ。

その行動にレイリーは首をかしげ、ルフィをみた。

ルフィは両手を上にあげ拳をギュツと握る。

「レイリー！俺はやるぞ！海賊王に俺はなる——!!」

そう宣言したルフィを優しい目で見つめる。

そして兄二人はいつまでも変わらない弟の宣言を聞いて、会話を弾ませていた。

「変わらねえな、ルフィは・・・。」

「ああ、でもそれでこそ俺たちの弟だ。」

「だな！」

その間に思わず制止していた海軍も動き出す。

声を上げながら走り出した海軍に気づき、ルフィたちも急いで駆け出す。

「きたー！行くぞ！ルフィ!!」

「レイリー、世話になった。」

「レイリー！本当にありがとう。俺、行ってくる!!」

そう言つて走つていったルフィをうれしいうれしいような寂しいようなそんな顔で見送る。そのメガネの奥にはうっすら涙が浮かんでいた。この2年間のことを頭の中で振り返る。そして目を開けたとき目の前には自分の弟子のひとりであるルフィを追いかける海軍の姿が映る。視線を遠くに移せば小さくなった弟子の姿・・・。息をゆっくり吸い込む。

「頂点まで行ってこい!!」

ルフィはその言葉を背に受け止め走り続ける。

そして、海軍も・・・。

そんな海軍の前に突然一つのラインがひかれ、砂埃がまう。

その砂埃が薄れていくの3人の人物がたっていた。

「なんだ、ルフィ君についていかなかったのか。」

「ルフィはもう仲間という。大丈夫さ。」

「ああ、それに久々に暴れたいでね！」

「そうか、さて・・・弟子の船出だ。良しなに頼むよ。」

そのセリフに海軍は顔を青ざめ、サボとエースは口角を上げる。

「ルフィの邪魔をするなら、俺たちが黙つちやいねえぜ。」

「ルフィのバックには俺たちがいることを忘れるなよ・・・海軍！」

戦鬪の構えをとる2人の間で静かに笑うレイリー。

「はは、ということだ・・・この線を超えないことをすすめる。」

その言葉に恐怖し、逃げていく海軍。

サボとエースは構えを解き、レイリーのほうへ体を向ける。

「さすがだな、レイリーさん。」

「ああ、でも俺はちよつと暴れてもよかつたけどな。」

「はは、君たちがいたからだろう。いい兄を持っているなルフィ君は・・・。」

レイリーの言葉に笑顔になった後、真剣な顔つきになる。

「本当に俺たち兄弟を支えてくれてありがとう。レイリーさん。」

「レイリーが覇気を教えてくれたおかげで俺たちは強くなれた。ありがとう！」

そう言つてサボとエースは頭を下げる。

レイリーはその行動に少しの寂しさを覚えながら「顔を上げなさい。」といった。

「楽しみにしているよ。君たちが今後この世界にどう影響を与えていくのかを・・・。」

「ああ！」

「・・・行くのか？」

「最後にルフィの仲間にあいさつしに行くんだ・・・本当にありがとう！レイリーさん！」

「じゃあな！ありがとうレイリー!!」

「ああ、行ってこい！」

ルフィと同じ言葉で2人を見送った。

その目には、期待と愛情が詰まっていた気がする。

そんなレイリーの瞳に見送られながら、エースとサボはルフィたちの船、”サニー号”へと向かうのだった・・・。

続

く・・・

麦わらの一味 再スタート 後編

その後ルフィたちはこの2年間麦わらの一味を支えてきた者たちの手助けもあり、無事サニー号へと到着することができた。再会を喜び話し合うルフィたちのもとへ再会の邪魔をする大砲が降ってくる。

「軍艦が・・・6隻も!」

ウソップが覗いだ望遠鏡に移るのは海軍の軍艦。

しかも6隻という多い数に驚く一味。大砲が当たりそうになるもどこからか飛んできたピンク色の矢により、当たることはなかった。ハンコックの能力により大砲が石化したのだ。

「誰じゃ、わらわの通り道に軍艦を置いたのは!!」

突然現れた七武海ハンコックの存在にサンジ、ウソップ、ブルツクの三人は騒ぎ出す。

が、ルフィの発言により静まる。

「あ、ハンコックたちだ。」

「」「え?」「」

「ルフィ!七武海と知り合いなの!」

「ああ、俺女ヶ島に飛ばされたから、みんな友達なんだ。」

そんな発言にみんな(サンジ)が悔しがり、泣き出す。

そんなコントのようなことをやっている間にハンコックたちを通り抜けて軍艦が3隻やってくる。

「やべえ!また来るぞ!」

「急いで出航するわよ!あんたたち!」

だが、ルフィは動かない。

「なにしてるのルフィ!急がないと!!」

ルフィはある一点を見つめて笑う。

「大丈夫だ、ナミ!ししし、エースとサボがもう向かった!俺のにーちゃんは二人ともさらに強くなったんだ!!」

ルフィの言葉にみんなの視線が集まる。

そこにはストライカーに乗るエースとサボがいた。

サボが一隻の船に乗り込み、核に渾身の一撃を放つ。

「竜の……息吹——!!」

サボの一撃で崩れる軍艦。

そして、ストライカーにのったエースは拳に炎をまとい軍艦に突き出す。

「火拳——!!」

兄二人が軍艦を1隻ずつ倒すのを誇らしげに見ていたルフィ。だが、突然震えだしたと思ったら手を伸ばし船に手をつける。

「俺もまけねえ!! ゴムゴムのーロケットー!!」

突然最後の軍艦へと飛んで行ったルフィに一味は呆然とする。

「あんたがいなきや出航できないでしょうがー!!」

一足早く戻ってきたナミのツツコみはルフィにはもう聞こえていない。

ルフィは親指を口にくわえ、自身の体に空気を送り込む。

みるみる大きくなっていくルフィの右手に海軍たちは恐れを抱く。

「武装色、硬化!」

大きくなったルフィの手が今度は黒く染まる。

その手に驚く海軍、そして麦わらの一味と誇らしげにみるエース、サボ、ハンコック。

その拳は、麦わらの一味再スタートのろしとなる。

「ゴムゴムの——象銃（エレファント・ガン）!!!」

大きな音を立てて、最後の軍艦も崩れていく。

ルフィも仲間たちも兄弟もしてやった顔で、満足そうだ。

だが、はたと気づくルフィはどこに着地するのだろうか。

当の本人は……

「あ、やべ」

と今気づいたようで空中で胡坐をかいて顎に手を置きのんきに考えている。

「あんのバカ!!」

急いでストライカーをルフィに向け走り出すエースとサボ。

その存在に気づいたルフィが笑顔で二人に向かって手を振る。

「おーい! エース! サボ! 助けてくれ」

ドボーン!!

水しぶきが上がり、ルフィが落ちる。

サボが慌てて海に飛び込み、ルフィを連れて上がってくる。

そのままストライカーでサニー号に向かい、三人で乗り込んだ。

「あはははは！わりわり助かったー！」

怒るエースとサボに対し、ルフィは終始笑顔だ。

「まったくお前はいつも考えなしに突っ込みやがって！」

「まあ、ルフィらしいけどな！」

そんなルフィに怒る気の失せた二人は、苦笑いだ。

だが、2人が仲間たちの方へ向くと表情は真剣なものになっていった。

エースとサボの雰囲気の変わりように仲間たちだけでなくルフィも困惑した。

「ルフィの仲間。はじめましてのやつもいるな。改めまして俺はエース。ルフィの兄貴だ。」

「俺はロビン以外ははじめましてだ。俺の名はサボ。革命軍で同じくルフィの兄だ。」

一味のみんなはどうもご丁寧。と頭を下げる。

まだ困惑したままの一味はさらに驚くことになる。

エースとサボがいきなり大きく頭をさげ、謝罪をしはじめたのだ。

「すまなかった！」

「俺が不甲斐ねえばかりにルフィには無茶をさせちまった。死んでもおかしくないぐらい。しかも、あの戦争のせいでルフィの親父の正体や、鬼の血を引く俺と兄弟だと全世界に知られた。俺のせいでこれから麦わらの一味…ルフィはもつと海軍に狙われることになっちゃまった!!」

「俺がもつと早くあの戦争に到着できたなら、ルフィはここまで傷つくことはなかった。俺が、本部でほうけてる間にルフィはインペルダウンで生死をさまよった！俺の仲間がいたから無事だったが、もしいなかったら、出会うことがなかったルフィは今頃…!!兄貴失格だ!!」

2人は頭を下げたまま、各々悔しそうな声を上げていた。仲間たち

にはきつと辛い思いをさせたことは痛いほどわかる。知らぬ間に大事な人が傷ついていた事実をして辛くないはずがない。だから、謝りたかった。攻めて欲しかった。何してくれたんだよ！って。

最初に口を開いたのはナミだった。

「はあ、なーに言ってるの。たしかにルフィが私たちの知らない間に戦っていたのを知って悔しかったし辛かった。でも、それはお兄さんたちも同じでしょ？ルフィは助けたかった。エースを。そして助けられた。ルフィは嬉しかったとおもうわ！これでもしエースを助けに行けなかったらきつと今ルフィはここにはいない。これが一番最善の選択だったのよ！それにね、ルフィの親が誰とか兄弟が誰とか関係ないわ！だってこの船にはオハラの生き残りのロビンや古代兵器を作ることが出来るフランキーもいる。実際世界政府に喧嘩売ったこともあるしね！もうしつかりと狙われてんのよ！この麦わらの一味は。だから、気にしないで！そんなこと言っていると、大事な弟のルフィが傷つくわよ？」

「全くナミさんのゆーとおおりだぜ」

「だな。」

「アウー！全くだぜー！」

「うふふ、ルフィはこんな私も仲間にしてくれた、そんなこと気にも止めないわ」

「そうだぜー！そんなこと言ったらいちよう俺も四皇赤髪海賊団ヤソツプの息子だからなー！知られてはねーけど（ボソ）」

「ルフィはいいやつだからなー！」

「ヨホホホルフィさんですからね〜」

その一味の言葉によく顔を上げるエースとサボ。

だか、その表情はまだまだ苦しげだ。

「ルフィの兄貴たちよ、よく見ろ、お望み通り攻めてくれるらしいぜあんた達の弟が。」

ゾロの言葉に全員がルフィの方を向く。

今までずっと無言でエース達の後ろにいた。

トレードマークの麦わら帽子のせいで表情はよく見えないが、怒っ

ているのは手に取るようにわかる。

「ルフィ?!」

エースとサボが同時にルフィを呼びかけるとルフィは顔を上げた。その表情は怒っているが、悲しげだった。

「なんだよ…兄貴失格つて。俺はエースとサボに守られなくて兄弟になつたわけじゃねえぞ。エースとサボと一緒にいたくて、助け合いたくて俺は兄弟になつたんだ。俺が助けに行っちゃダメなのは弟だからか？俺が死にそうになつたら兄貴だからみんなに謝んのか？…兄貴だつたら!!死にそうになつてもいいのかよ!!」

ルフィは思い出す。サボが死んだ時のことを。エースの公開処刑の記事を見た時のことを。

エースは思い出す。サボが死んだ時のことを。ルフィが倒れた時のことを。

サボは思い出す。エースの公開処刑の記事を見た時のことを。ルフィが倒れた時のことを。

「そうだ。そうだな。俺たちは助けて助けられてきた。」

「ルフィは守るべき対象の弟じゃねえ、ルフィは俺たちとともに成長し守り合う兄弟だ!」

ルフィの言葉に自分たちがルフィを下に見ていることに気づいた。それが今まで力をつけてきたルフィへの侮辱になるとも知らずに。エースとサボは再び妻わらの一味に向き合う。

「さっきの言葉、失言だった。忘れてくれ。」

「俺たちの弟と仲間になつたのがおめえらでよかつた。」

「二弟には手を焼くだろうが、これからもよろしく頼む(よ)」

今度はこのやかに晴れた顔で2人の兄は弟の仲間に伝えた。

それに対して8人全員笑顔で頷く。

「ルフィ、ありがとう。」

「俺を俺たちを助けてくれて。」

2人は謝罪の代わりにお礼をした。

ルフィが求めているのはこつちだと気づいたから。

「ししし、わかればいんだわかれば!」

ルフィの言葉にこの件は解決した。

みんな心残りはなく、晴れやかだ。

「よし！おめえら!!この2年間！俺のわがままに付き合ってくれてどうもありがとう!!」

このセリフに一味はいつものことだろう？とツツコミを入れる。

それに対し、「しししッ」と笑うルフィは大きく息をすう。

「出航だー！！！！！！！！！！」

サニー号が沈んでいくのを船から降りたエースとサボが見送っていた。姿がみえなくなると、2人はエースのストライカーで走り去っていく。

「エース、ルフィは強くなったな。」

「ああ、親父もルフィを認めてた。あいつならきつと夢を叶えるさ。」

「そうだな。俺たちも負けねえようにしねえとな!!」

「だな！とりあえず久々に100本勝負やろうぜサボ！」

「ああー！」

いずれ、海賊王になる弟の姿を想像し、微笑み鍛えあうエースとサボであった。

続く